様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月３０日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2006～2008
課題番号：18720060
研究課題名（和文）　啓蒙期における寓話の表現―近代寓話史の構築のために

研究課題名（英文）　The study of expressions of the allegory in the period of an enlightenment in Japan(1898-1991)

研究代表者
木戸　雄一(KIDO YUICHI)
国文学研究資料館・複合領域研究系・助教
研究者番号：30390587

研究成果の概要：
国会開設に向けて書かれた啓蒙的文献の中から寓話的表現を調査した。それらを国会開設前の国会に関する寓話としての「国会未来記」、近世文学の形式を借りながら、国会を間接的に寓話化した作品群に分類し、それぞれに検討した。その結果、「国会未来記」には啓蒙書の記述に沿った議論像が描かれているが、演説の描写に比べ、議論における言葉のやりとりは生硬な表現に終わっていた。一方、近世文学の形式を借りた国会物は、議論のやりとりが、口承的な表現として形式化されていたジャンルに則ることで、オーラルな見かけを持った表現に達していた。また、異なる階層間の言語のやりとりなどで、文体同士が衝突するが、合意は「行司」などの役割に任されており、議論の収斂をうまくイメージできなかったことがわかった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,000,000	0	1,000,000
２００７年度	700,000	0	700,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	270,000	2,870,000

研究分野：近代文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：近代文学・国文学・比較文学・文学一般・文学論・芸術諸学

１．研究開始当初の背景

寓話は「政治小説」の多くを含み、また啓蒙期から文学以外の諸言説にも多く使われ、それらと文学の架橋となる有力な表現形式の一つである。その点で上記のような啓蒙期の表現全般を分析、再評価するきっかけとして格好の題材である。寓話は、近世期の教訓物から啓蒙期の寓話へ、またそれ以降も「ゾライズム文学」や「少年文学」、さらに国木田独歩の諸作品のような代表的な近代文学にまで受け継がれる。寓話という観点は、これら別のジャンルに属するものと考えられている諸作品を一連の系譜として捉えることができる。研究開始当時から、ゲーム、アニメ、ライトノベルなどによって寓意を必須とした表現はむしろ主流になりつつあった。本研究はこれら現代の表現を歴史的な位相で考察するためにも、資料と理論的基盤を準備できると考えた。

寓話と明治前期の文学表現の関係につい

ては、亀井秀雄氏が論じており、特に『〈小説〉論』（平 11、岩波書店）の中で、『小説神髄』や読本の表現分析などと関わらせつつ、寓意について論じているが、近世期の寓話や、啓蒙期の寓話の大きな要素を占めた諷刺滑稽文学などへの言及は少ない。また、西田谷洋氏は『語り・寓意・イデオロギー』（平 12、翰林書房）において、語りの理論的な分析の中で言及しているが、理論的純化を主な目的としており、寓話とその時々の具体的な学術情報や倫理観念との歴史的な関係性の考察を、その目的とはしていない。本研究は情報伝達の手法としての寓話について、そのジャンルの記憶と具体的な伝達内容との関連、およびその受容の実態を調査・分析し、歴史的な考察を行おうとするものである。その考察を通して啓蒙期という、当時のいわばグローバリズムの波の中で、新たな情報をどのように提示し理解させようとしたのか、またそれらの情報がどのように消費されたのかについて明らかにする。その結果、新たな情報の理解と消費に奔走する現代の言語状況に対する考察と提言も可能であろうと考えた。

２．研究の目的

（１）啓蒙期は、当時世界標準となりつつあった、西欧を基準とした知の空間へと新たに参入する時期であった。そのような新たな情報を伝達する機能の一つとして寓意は重要な位置を占める。寓意は古い器を借りつつ、新たな情報を伝えるというコミュニケーションの機能があり、そこに異質なもののせめぎ合いによる、翻訳にも匹敵する新たな表現の可能性があった。言語表現としては寓話という形を主にとり、またそれは寓意が込められた図像的な表現を伴う場合もある。寓話は啓蒙期の情報伝達の手法として重要な位置を占めている。本研究はコミュニケーション手法としての寓話が、情報を伝える過程で文学やその他の言説をどのように変質させ、また人々の物のとらえ方、考え方にどのような変化を与えたのかを考察する。

寓話は、リアリズム中心の近代文学観の中で、明治前期の場合は特に「政治小説」というジャンルに「前近代」のレッテルと共に囲い込まれていた観がある。これを寓話という概念に一般化することで、リアリズム文学とされているものの中にも寓話の系譜を見出し、近世から近代の文学・文化の諸言説を分析するための新たな系譜学を創ることができる。

以上の目的のもとに、本研究は啓蒙期の寓話文献、および「政治小説」とされていた諸作品の形式とそれに託された寓意との関係に関する分析を中心に行う。教訓的なテーマに即した寓話の研究はすでにいくつか試みられているが、本研究では、新たに移入された形而下的な情報（科学情報など）の啓蒙を目的とした寓話の研究をも行う。これは、後のゾライズム文学や科学冒険小説などにつながるものであり、系譜を追っていく上でこうした後代の文学に考察や調査が及ぶ場合もある。図像の寓意との関連に関しても対象に即して適宜研究を行う。

（２）近代日本文学は坪内逍遙らのリアリズム文学の提唱を以て始まりとするのが常である。そのような文学史の構想は、前代の文学として「政治小説」ジャンルを措定し、そこにリアリズムに属さぬ文学を囲い込んだ上で、それらの前近代性を克服した「近代文学」としてリアリズム以降の文学を規定している。一方、柳田泉が述べているように、「政治小説」は政治という題材を含んだ小説群だが、その形式は極めて多様である。しかし、先に述べたような文学史観が、啓蒙期の文学及び諸言説の表現上の実験をその後も継承されているものとして考察する機会を奪っている。むしろ「政治」という題材上の限定をはずし、各々の表現形式自体を啓蒙期の表現の多様性として分類、分析するという表現史的な研究手法が、「政治小説」から「近代小説」へという単線的な文学史を超えた、新たな系譜学を近代文学、さらに近代の諸言説の上に描くことができるであろう。

３．研究の方法

「政治小説」の中でも、特に明治期になって移入された新たなコミュニケーションの形式そのものを寓話化したものに、調査と収集の焦点を絞る。具体的には、国会開設に向けて大量に出現した国会物に描かれた、議論と意志決定の寓話には、旧来の談話、対話の形式を持った表現形式の借用による議会の理解の試みが見られ、必ずしも国会を舞台とした設定ではないものも多い。また、「国会とは何か」という啓蒙を目的とした寓話は作者の国会理解に基づいており、同時に作者の政治的立場を反映した寓意をその内容としている場合が多い。各々の立場によって国会に期待するものやイメージが異なり、それが国会物の寓話をバリエーション豊かなものにしている。これを、当時の対話や教導といった啓蒙のための情報伝達の形式とも比較しつつ考察したい。そのために国会物を中心とした議論・対話・教導を描いた作品を収集し、そのリストを作成し、表現形式および寓意の内容の分類・分析を行う。その際、補助者による入力や複写の補助による作業の効率化を考えている。また、議論・対話・教導の形式を持った「政治小説」には、科学や社会科学の知識の啓蒙を目的としたものもある。国会物に加え、このような作品の収集、分類、分析をも同時に進める。

国文学研究資料館には「政治小説」の所蔵が多く、大部分をまかなえるが、雑誌や新聞に掲載された物や、稀覯本などには披見が困難な物もある。それらは全国の図書館を利用し、複写の収集や実際に赴いての調査が必要である。その際、国文学研究資料館で公開している近代文献の調査データの利用も有効である。また、文献リストの作成及びその内容の把握、同時代のとらえ方などは、新聞等の出版広告が有効である。国文学研究資料館の明治期出版広告データベースからその情報を得ることができ、調査対象となる作品の選定の労力を軽減することができる。

４．研究成果

（１）平成１８年度は、以下の作業を行った。
①「郵便報知新聞」の国会開設前後の啓蒙記事の収集と整理。
②国会・会議・議論に関する啓蒙文献の収集と整理。
③国会未来記系統の政治小説を中心にした小説の収集と調査。
④成田山仏教図書館等でのお伽噺文献の調査。

特に、国会開設に向けて、議論とそれによる意志決定という新しいコミュニケーション形式を、どのような先行寓話の形式を借用しつつ、啓蒙していったのかを調査した。旧来の談話、対話の形式を持った表現形式の借用による議会の理解の試みが見られ、必ずしも国会を舞台とした設定ではないものも多かった。例えば、西村天囚『屑屋の籠』は、馬琴の『昔語質屋庫』のパロディだが、登場する擬人化された屑物たちが、相互に議論を戦わせる展開であり、その議論の方法も、当時の議論に関する作法書に則っている。今回は改進党系の文献を中心に調査したが、その他に八戸青年会など各地の青年会組織に、議論のレッスンを実際に行った際の文書があることがわかった。また、第一回帝国議会開設後に、会議の模様を伝えた小冊子が、行商などの新聞や雑誌とは異なるルートで流通し、そこでも国会が寓話化されていることがわかった。

また、近代小説をお伽噺化した明治末から大正期のお伽噺の調査に着手した。近代小説が子ども向けに寓話化される場合の様態の研究を進めている。

（２）平成１９年度は、以下の作業を行った。
①「絵入自由新聞」の啓蒙的言説・文芸の出版広告の収集と整理。
②国会・会議・議論に関する啓蒙文献の収集と整理。
③国会未来記系統の政治小説を中心にした小説の収集と調査。
④啓蒙的言説としての少年向け小説の調査。

前年度に引き続き、国会開設に向けて、議論と意志決定という新しいコミュニケーション形式を、どのような先行寓話の形式を借用しつつ、啓蒙していったのかを調査した。また、その文献として、前年度の「郵便報知新聞」に続き、「絵入自由新聞」所載の記事や出版広告を重点的に調査した。改進党系の言説と比べ、実録や合巻など、江戸期の通俗小説の形式を積極的に採用し、新聞の「つづき物」として連載していく過程がわかった。さらに演劇化や紙面を大胆に使ったビジュアルな表現など、文学以外のメディアとも頻繁にコラボレーションすることで、多角的に読者に働きかける様態が把握できた。

さらに、明治末年から外国文学の翻案として登場した「少年探偵小説」を分析し、翻案のいくつかの段階で啓蒙のための情報の取捨と整理が行われ、それぞれ想定する読者に合わせてテクストが変質させられていることを分析した。その際に、１８年度に行ったお伽噺化された近代小説の調査の結果が有用であった。また、読者が必ずしもその啓蒙の意図に沿った反応を示していない点についても言及し、考察した。成果は「「少年探偵小説」の条件―三津木春影『探偵奇譚呉田博士』の場合―」（『児童文学翻訳大事典第四巻』、大空社、2007 年）として発表した。

（３）平成２０年度は最終年度として、以下の作業を行った。
①「絵入自由新聞」の啓蒙的言説・文芸の出版広告の収集と整理。
②国会・会議・議論に関する啓蒙文献の収集と調査。
③国会未来記系統の政治小説を中心にした小説の収集と調査。

前年度に引き続き、国会開設前の啓蒙的文献の中から寓話的表現を調査した。それらを国会開設前の国会に関する寓話としての「国会未来記」、近世文学の形式を借りながら、国会を間接的に寓話化した作品群に分類し、それぞれに検討した。その結果、「国会未来記」には啓蒙書の記述に沿った議論像が描かれているが、演説の描写に比べ、議論における言葉のやりとりは生硬な表現に終わっていることが明らかになった。一方、近世文学の形式を借りた国会物は、議論のやりとりが、口承的な表現として形式化されていたジャンルに則ることで、オーラルな見かけを持った表現に達していた。また、異なる階層間の言語のやりとりなどで、文体同士が衝突するが、合意は「行司」などの役割に任されており、議論の収斂をうまくイメージできなかったことがわかった。これらは、今後「国会物」の流通・受容といった事柄と絡めつつ、より高次の研究としてまとめたい。

また、行商などで流通した国会物のテキス

トの収集が実現し、その流れも含め、地方に流布していく国会の議論像が、それぞれのメディアでどのように描き分けられているのかについて、新たな研究の可能性が見い出された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計１件）
①木戸雄一「少年探偵小説」の条件―三津木春影『探偵奇譚呉田博士』の場合―、児童文学翻訳大事典第四巻、2007 年

６．研究組織
(1)研究代表者
木戸　雄一　(KIDO YUICHI)
国文学研究資料館・複合領域研究系・助教
研究者番号：30390587